

財団法人

日韓文化交流基金

NEWS



第12回日韓・韓日合同学術会議

日韓文化交流会議

第2回日韓青少年交流ネットワークフォーラム

助成事業紹介

第二回アジア職人文化専門家会議

日韓で展開したアジアの匠の技

no.

12

2000

The Japan-Korea Cultural Foundation

星のひろば 1998年 (F10号・油彩)

朴香淑 (パク ヒャンスク)

1968年 韓国ソウル市生まれ

1997年 多摩美術大学油画専攻卒業

現在 多摩美術大学大学院在学中

日韓文化交流基金NEWS

目次

2	巻頭エッセイ 小さな音楽祭の大きな志	姜信子
表紙作品題名および表紙作家紹介		
3	第12回日韓・韓日合同学術会議	松本健一
4	日韓文化交流会議 日本と韓国の距離	三浦朱門
6	第2回日韓青少年交流ネットワークフォーラム	
8	助成事業紹介 日韓で展開したアジアの匠の技 第二回アジア職人文化専門家会議	金子量重
9	文化エッセイ 第1回 冷麺について	原 武史
10	日韓文化交流基金事業報告	
12	図書センター情報 / ホームページ情報	

巻頭エッセイ 小さな音楽祭の 大きな志

姜信子
作家

「きょう」という自己の力が発見があった。それは、情報や文化とは中央で作られるもの、日本国の辺境に生きる我らはその受け手でしかありえないという固定観念から解放されてゆくプロセスでもあった。

この創り手たちの志と意気に応えて、ちんぐ音楽祭が初回から毎回参加の小室等氏とカン・サネ氏を中心に、ちんぐ音楽祭に共鳴する日韓のアーティストたちが毎年対馬にやって来ては新しい人間関係を結んできた。今年も遂にその果実として、日韓のアーティスト共演の「ちんぐの歌」が誕生。「俺たちを狭い世界に押し込める枠など、笑い倒してやれ！」と、鋭い諷刺を笑いで包んだパフォーマンスを本領とする韓国のファンシネバンドの「コミカルでパワフルな演奏に、歩き始めたばかりの赤ん坊から老人まで、誰もが我慢できずに立ち上がって踊りだす」という事件！もあって。

今秋も、日韓の国境に最も近い島・対馬の海辺で、日韓のアーティストが集う「対馬ちんぐ音楽祭」が開かれた。今年で四回目。例年どおり、アーティストたちの歌に始まり、日本人も韓国人も歌う者も聴く者も入り乱れての無礼講の交流会で幕を閉じた。ちんぐ音楽祭の魅力は、島民ボランティアスタッフの手作りの運営が醸し出す素朴で温かな空気だ。私自身、この音楽祭には初回からずっと関わっている。というのも、一九九五年に美津島町が主催した日韓交流シンポジウムにパネリストとして参加した私の「ここで音楽祭をやろう」という一言が発端になっているからだ。朝鮮通信使の最初の上陸地だったこの島に、現代の音楽通信使を迎えよう。そんな話をした記憶がある。

その一言を受けた対馬側には対馬側の「思惑」があった。日韓交流事業を島の活性化へとつなげていくことだ。私にも「思惑」はある。目指すは「交流よりも創造」。音楽を導き手にすべての参加者が、日本国の文化を背負った日本人という枠、韓国の文化を背負った韓国人という枠から飛び出し、対馬という場所を結び目に国境を横断する新しい人間関係、新しい文化の母胎となる人のネットワークを形作れるなら、国境線に縛られた私たちの人間観、文化観をわずかでも解き放てるなら、と思っていた。

こうして二つの「思惑」が手を結んで、暗中模索の試行錯誤を繰り返すうちにはや四年。対馬の人々に、「代理店に発注せずとも音楽祭はできる、いや自分たちの手で創らないのなら意味はない」という創り手意識が芽生え始めた。「普通の人間である自分たちでも、日韓間に文化交流と新しい文化創造の場を作ることがで

きょうのふこ
一九六一年生まれ。東京大学法学部卒業後、広告会社にコピーライターとして勤め、八六年に「ごく普通の在日韓国人」で朝日ジャーナルノンフィクション賞を受賞。以降、文筆活動に入る。主な著書に「ごく普通の在日韓国人」「日韓音楽ノート」など、訳書に「遙かなる静けき朝の国」がある。



姜信子

第12回日韓・韓日合同学術会議を終えて

麗澤大学国際経済学部教授 松本健一



合同学術会議の様相（11月13日）

一九九九年十一月十二日〜十四日まで、第12回日韓・韓日合同学術会議が、韓日文化交流基金と日韓文化交流基金の共催で開催されました（韓国江原道洛山）。日本側委員のおひとりである松本健一先生に、会議のご報告をお願いいたしました。

一九九九年十一月十二日〜十四日の間、第12回日韓・韓日合同学術会議が、韓国江原道洛山ヒーチホテルにて、日本側八名、韓国側九名、オブザーバー一名で開かれました。

この「日韓・韓日合同学術会議」は一九八六年に始まり、定期的に学術の集いを開催し、これまで十一回にわたって両国の学者・研究者による、純学術的な討議の場として、両国における歴史的理解を共有することに貢献してきました。

今回の会議の統一テーマは、「世界の中の東アジア文化」であり、第一セッションは、「韓国と東アジア文化」、論文発表は、陳徳奎氏「東アジアの伝統文化と近代性との遭遇について

のひとつの序説」と、川村湊氏『朝鮮と不感』 崔南善にふれて」でした。第二セッションは、「日本と東アジア文化」、論文発表は、平川祐弘氏「世界と東アジア文化」と、韓敬九氏「プロセス的文化観念から見た日本と東アジア」でした。第三セッションは、「韓国文化と日本文化の共通性と独自性」、論文発表は、池明観氏「李光洙と日本 ひとつの試論」と、馬越徹氏「学校文化の日韓比較」でした。きわめて多岐にわたる素材とテーマとして活発な討議の結果を、ここで簡単に要約することは出来ませんが、しかし会議の全体として浮上してきたことは、おおよそ次のようにまとめられるでしょう。

開催日程 平成11年11月12日(金)〜11月14日(日)

11/12
韓日文化交流基金理事長主催歓迎レセプション

11/13
開会式 開会挨拶：李相禹（韓日文化交流基金 理事長）
祝辞：熊谷直博（日韓文化交流基金 理事長）

第1会議「韓国と東アジア文化」
司会：衛藤潘吉（東洋英和女学院 院長）
発表：陳徳奎（梨花女子大学校政治外交学科 教授）
川村湊（法政大学国際文化学部 教授）
討論：田代安見子（文藝春秋『諸君！』編集部）
姜正仁（西江大学校政治外交学科 教授）

第2会議「日本と東アジア文化」
司会：松本健一（麗澤大学国際経済学部 教授）
発表：平川祐弘（福岡女学院大学人文学部 教授）
韓敬九（江原大学校人類学科 副教授）
討論：權肅寅（ソウル大学校比較文化研究所 常勤研究員）
衛藤潘吉

第3会議「韓国文化と日本文化の共通性と独自性」
司会：金容徳（ソウル大学校東洋史学科 教授）
発表：池明観（翰林大学校日本学研究所 所長）
馬越徹（名古屋大学教育学部 教授）
討論：大村益夫（早稲田大学語学教育研究所 教授）
徐淵昊（高麗大学校国文学科 教授）

総合討論・閉会 司会：高柄翊（文化財委員会 委員長）

11/14
雪岳山視察

東アジアという概念も近代の産物である。そうだとしたら、日韓あるいは中国において近代化の過程がそれぞれ異なることを考えると、東アジアという概念の内容もそれぞれ微妙に異ならざるをえない。しかし、文化を国民国家（ネイション・ステート）が統括したのが近代という過程であってみれば、そこには当然日韓で同じテーマが潜在し、又今後の共通の課題が問われることになるであろう。つまり歴史的に見て、民族の文化的持続はどのようにして可能であり、そこでの変化はどのようにして起こったか。そして、これからは文化を国家単位で考える呪縛から我々は抜け出していくべきではないか、という現代的な要請である。

その結果、国民国家を超えようとはしていないが、近代の国民国家の性格を変えていくことがこれからは必要ではないか。その上で、いわば「東アジア文化共同体」のようなものが可能であるか。また東アジアの文化と西洋の文明の違いを明確にしてゆく必要があるだろう、といったところまで議論は白熱化した。

こつこつとした議論の白熱化は、過去十年あまりの合同学術会議の蓄積があつて、はじめて可能になったものといえるでしょう。会議のあと参加者の一人が、こんなに議論が熱中して行われながらも、後でこれほどに爽やかな気分になる国際会議もめずらしい、と述懐していたのが印象的でした。

日韓文化交流会議

昨年の九月二十二日（水）、ソウルの新羅ホテルにて、日韓文化交流会議第1回全体会議が開催されました。この会議の様様を紹介し、また、三浦朱門日本側座長にこの会議に関する所感をいただきました。

この「日韓文化交流会議」は、九八年十月の金大中大統領の訪日の際に、金大統領より提案され、昨年三月の小淵総理訪韓時の日韓首脳会談においてその設置が合意されたものです。

この日の会議には、日韓双方より文化芸術分野の有識者二十名が参加し、二〇〇二年ワールドカップ共同開催を契機に盛り上がりつつある両国の文化交流のさらなる活性化と具体的な事業の推進方策について意見の交換が行われました。

会議冒頭に行われた基調発言では、まず、韓国側の池明観（チ・ミョンガン）座長（翰林大学校日本学研究所長）が、既存の両国関係を政治・経済に重点が置かれ、真の国民レベルでの相互理解が欠如していた「六十五年体制」、そして、ワールドカップの共同開催を契機に幕を開ける国民レベルの文化交流の時代を「二〇〇二年体制」と定義し、大会に向けて地域レベルで、日韓のみならず他の



会議の様様

アジア諸国の参加をも含めた文化交流事業が推進されることが望ましいと述べました。

一方、日本側の基調発言者である平山郁夫副座長は、北朝鮮にある高句麗古墳群のユネスコ世界文化遺産への登録のために日韓文化交流会議が尽力することを訴え、また具体的な交流事業として、両国の国立博物館による文化財の共同展示会、朝鮮通信使関連事業の

日本と韓国の距離

日韓文化交流会議日本側座長

三浦朱門

日本と韓国の首脳の取り決めで、日韓の文化交流を軌道にのせることになった。しかし文化と権力とはなじまない。その悪しき先例は日本の朝鮮半島支配の当時のことを考えれば明瞭である。

日本には朝鮮半島の文化を破壊しようという意図はなかったかもしれないが、日本文化を政治権力によって浸透させようとする営為は、結果的には朝鮮半島の文化を破壊することになったし、それが彼らが深い恨みを抱く結果になった。文化は強制するものでなく、求めるものである。それで文化交流については、政府主導ではなく、民間の有志の委員会が、その方途を探ることになった。

こうして、今度の両国の委員会が作られたのはあるが、これは政府とは無関係とはいえないが、政府の

日韓文化交流会議メンバー

日本側メンバー（委員は五十音順）

座長	三浦朱門	作家
副座長	平山郁夫	画家
副座長	小此木政夫	慶應義塾大教授
委員	饗庭孝典	杏林大客員教授
委員	千宗室	裏千家家元
委員	田中優子	法政大教授
委員	芳賀徹	京都造形芸術大学長
委員	広中平祐	山口大学長
委員	松尾修吾	財団法人音楽産業文化振興財団理事長
委員	黛まどか	俳人
委員	水谷幸正	浄土宗総合研究所所長
事務局長	熊谷直博	日韓文化交流基金理事長

韓国側メンバー（委員は가나다順）

座長	池明観	翰林大日本学研究所所長
副座長	金容雲	漢陽大名誉教授
副座長	崔相龍	高麗大教授
委員	姜萬吉	高麗大名誉教授
委員	高銀	詩人
委員	柳鈞	韓国放送公社解説主幹
委員	朴性垠	梨花女子大大学院教授
委員	李成千	作曲家
委員	李清俊	順川大客員教授
委員	林英雄	劇団「サヌリム」代表
委員	張明秀	韓国日報社長
事務局長	徐淵昊	高麗大教授



会議後の共同記者会見

推進などを提案しました。午後のセッションでは、自由討論が行われ、各参加委員からそれぞれの専門分野の立場に立った幅広い分野にわたる意見が発表されました。

また、昼食時には、両国のメンバーが青瓦台（大統領官邸）に金大中大統領を表敬訪問し、同大統領主催の昼食会に出席しました。この席で金大中大統領は、ワールドカップの共同開催が「神の啓示」であり、これをきっかけに文化に基づいた新たな日韓関係の土台を築いてゆくべきであると述べて、日韓文化交流会議に大きな期待をかけていることを明らかにしました。

この日の会議で話し合われた内容は、両国政府に報告され、今後の文化交流事業推進の上で大きな道標となることが期待されます。今後、両国メンバーのうちそれぞれ三名（座長一名、副座長二名）からなる合同運営委員会が随時開催され、詳細な部分についての協議が行われた後、二〇〇〇年には第2回全体会議が日本で開かれる予定になっています。

束縛は受けない。委員会は話し合いの結果、合意に達した事項を、政府や民間に提案することはできても、そのプロジェクトを実施する力をもたないし、持つてはならないと思う。

いや、政治力だけではなく、経済界の力を頼ってもいけないものではない。たとえば一つの企画について、日本の財界の援助を受けたとしても、企業は本質的に営利団体であるから、韓国との交流に役立つ企画を援助しようとする企業や業界というのは、韓国に経済的利害を持つ組織である。そこで日本の経済力を背景にすると、韓国側からは日本の経済進出、と批判されるかもしれない。

政治も経済もダメとなると、文化交流を目的とするわれわれの委員会には、現実には実行力を持たないことになって、要するに閑人の遊びにしかならないのであろうか。私はそうは思っていない。日韓の文化については交流が実施されている、あるいは実施されかかっていながら、両国民がそれを認めようとしていないか、気がついていないことがあると思う。それを政府や民間に提案することで、植民地支配の陰謀だとか、経済侵略だ、などと言われない形で、様々な計画を実施することが可能だ、と私

は信じている。

たとえば、両国民は、互いの文化が伝統的に深い関係にあることに薄々気付いている。一方はそれは自分が教えてやったのだと主張してきたし、一方はいやまたまたそれが朝鮮半島を経由したにすぎないと、その役割を過小に評価しようとする。

両者を一堂に並べてみると、日本には朝鮮半島から学んだ部分もあり、朝鮮半島は通路の役割を果たした物もあり、日本が独自に開発した分野もあることに、人々は気付くであろう。たとえばそのような場を作ること提案すれば、政治的陰謀の経済侵略のと言われることなく、海峡を隔てた両国民の相互理解のきっかけを作れるのではあるまいか。



みうら しゅもん

作家。1926年生まれ。東京大学文学部言語学専攻卒業。日本大学芸術学部教授を経て、67年『箱庭』により新潮文学賞受賞。85年に文化庁長官就任（～86年）。87年に恩賜賞・日本芸術院賞受賞。著書に『冥府山水図』『若葉学習塾』『ささやかな不仕合わせ』『日本人の心と家』ほか多数。

第2回 日韓青少年交流ネットワークフォーラム

十月二十九日から十一月三日まで、韓国のソウルと江原道平昌で、第2回日韓青少年交流ネットワークフォーラム（主催「日韓文化交流基金、国際文化交流推進協会、大阪国際交流センター、韓国国際交流財団、韓国青少年団体協議会、国際教育振興院」）が開催されました。

このフォーラムは、両国の青少年と青少年指導者が一堂に会し、より広がりを持った交流を生み出していくための機会を提供することを目的として、一九九七年一月の日韓首脳会談での合意を受けてスタートしました。第1回は、同年五月に大阪で開催されています。

二回目となる今回は、「新しい千年の日韓青少年交流…その方向と実践課題」をテーマに、「大学生」（日韓両国間または多国間の国際交流活動に参加している学部学生および大学院生）、「高校教員」（日韓両国間または国際的な学生交流活動を担当する現職の高校教師）、「NPO」（国際交流団体・市民団体で青少年交流業務に携わっている実務担当者）または青少年関連市民団体の指導者（の三つの分科会に分かれ、日韓両国から約百人のメンバーが参加し



全体会議 パネルディスカッション（10月30日）

ました。開会式および全体会議はソウル北郊のアカデミーハウスで、分科会別の会合は、ソウルから車で約二時間半の距離にある江原道平昌のフェニックスパークホテルで開かれましたが、会場はいずれも山間に位置しており、紅葉に包まれた素晴らしい環境の中で議論が交わされました。

まず、最初に行われた全体会議では、元文化部長官で『縮み志向の日本人』の著者として知られる李御寧（イ・オリョン）梨花女子大学客員教授が基調講演を行い、二十一世紀を目前に控えた時点で、未来を担う日韓の青少年が新世紀における交流



分科会での討論（10月31日）

のあり方について話し合うことの意味について述べられました。続いて行われたパネルディスカッションでは、今後の日韓交流には、「未来志向的かつ長期的なアプローチが必要である」などといった意見が出され、フォーラムの幕開けにふさわしい熱い内容となりました。

その後、舞台を江原道に移して行われた分科会議では、フォーラム最終日に発表される共同発表文の文案をまとめるため、熱心な討論が行われました。予定されていた会議時間だけでは足りず、夕食後、深夜にかけてまで討論を続ける分科会もあ



親善の夜 カラオケ大会で盛り上がりました（11月1日）

り、特に各分科会の代表・記録者の方々は、ほとんど夜を徹して意見を交換する日が続きました。

このような真摯な話し合いの結果、最終日の全体会議では、これまでの交流の殻を破る新たな交流のあり方を盛り込んだ「共同発表文」および「分科会別報告」が発表されました。

今回のフォーラムでは、全体会議での基調講演およびパネルディスカッション、分科会での討論などで、今後の日韓間交流について、これまでの受動的で型にはまった交流から脱皮し、両国関係の新たなパラダイムを土台とした、能動的かつ創意的な交

第2回 日韓青少年交流ネットワークフォーラム共同発表文

第2回日韓青少年交流ネットワークフォーラムが、1999年10月29日から11月3日まで、韓国のソウルと江原道平昌で開催された。日韓両国の大学生、高校教師および民間団体（NPO）の実務者が参加した今回のフォーラムは、ニューミレニアムを迎え、日韓青少年交流が進むべき方向とその具体的な実践と方法を探ることを目的とした。

参加者は、日韓両国が21世紀の新たなパートナーシップを構築していく上で相手に対する尊重と理解が先立たなければならないという点で認識をともにし、正しい歴史認識を涵養するための努力を引き続き傾けながら、多角的（マルチパラダイム）な視点から未来志向的な交流と協力を拡大していくことにした。また、寛容と和解、協働と分かち合いの精神に立脚して地球社会共通の問題解決に対する関心をより一層高め、全人類の共同繁栄と発展に寄与するため、共に努力することにした。

大学生分科会では、これまでの受動的で型にはまった交流から脱皮し、能動的かつ創意的な交流に変化していかなければならないという点を確認した。そのことの実現に向けて、青少年自身の自発的な努力と共に、社会的な条件の造成が必要であることを強調して、次の通り実践課題と方法を示した。

1. 日々増加しつつある留学生及び交換学生を通じた青少年交流の充実
2. インターネット及びマスコミを通じた情報交流の量的拡大及び質的な改善
3. 2002年ワールドカップの共同開催を契機としたボランティア間の交流及び協力

高校教師分科会は、21世紀の地球社会を担い、平和文化の創造に貢献する日韓両国の青少年の出会いと教育の重要性を認識



学生分科会の代表が、共同発表文を発表しました（11月3日）

し、双方の制度化された認識の壁を克服するため、両国の青少年及び教師間の交流に対し、次のような事項が実践されるよう努力することとした。

1. 人間的な心のつながりを可能にする多様で豊かな出会いの場を構築する。
2. 国際化、情報化の時代を迎え、メディアやサイバー空間での出会いを通じて、効率的な交流の機会を拡大する。
3. 他文化理解のための教材及び授業方法等を開発・交換する。

NPO分科会は、国際化時代の地域活性化と人材育成という2つの側面から話し合った結果、新たな日韓関係のパラダイムの設定と青少年交流の望ましい方向と確立のため、重要な課題として次の通り具体的な方策を提示することにした。

1. 両国のNPO団体間の情報網の整備及び定期的会合のための連携体制の構築
2. 両国のNPO間におけるインターシッププログラムの創設と活性化のための国際交流支援機関による協力
3. 韓国における国際交流員制度の創設とその促進のための両国政府の支援人及び在韓日本人等の社会的資源としての人材の発掘と活用
4. 両国の国際交流の現状とニーズに対する共同の調査・分析

1999年11月3日

参加者一同

流に変化していかなければならないという点が強調されました。共同発表文、分科会報告にもそのような方向性が反映されていると言えるでしょう。

この他、フォーラム期間には、高麗時代に創建された寺院の見学や伝統芸能の鑑賞、窯元での陶磁器制作の実習、雪降る中での登山など、韓

国の文化に直接触れる機会が設けられ、参加者の印象を深くしていたようです。また公式プログラムの親善パーティーや、自由時間を利用して

の両国の参加者同士の交流も大変盛り上がり、互いに今後の交流活動の推進を確認する姿が多く見られました。

日韓で展開したアジアの匠の技

第二回アジア職人文化専門家会議

『アジア民族造形文化研究所所長
『アジア職人文化専門家会議』議長

金子暲重

過去五十年にわたり、日本はもとよりアジア全域を歩き、建造物から衣服や飲食器、信仰、学び、芸能、遊びや生産の場で用いる「もの」にいたるまで、優れた匠の温かみある手仕事をたずねてきた。忠実な仕事ぶりはすばらしいの一言につきる。今日「世界の文化遺産」と讃えられる「もの」のすべてが、地域の偉大な歴史を組み立て、民族の暮らしや心の支えとしての証の数々である。それを造りつづけた人こそすぐれた職人（匠）である。便利さと豊かさだけを求めた近代化がすすむ中で、社会を混乱と恐怖に陥れている「手抜き工事」が今大きな問題となって私たちに襲いか

かりつつある。かつて「職人氣質」といわれて人々から信頼されてきた、職人たちの仕事ぶりや心意気こそ現代産業が学ぶべき点であろう。そこで彼らの仕事を通して「民族の造形感覚」の本質を確認し、その保護と後継者の育成など、アジアの人々とともに考えかつ行動しよう。一九九八年『アジア職人文化専門家会議』を創設した。従来のこの種の会議はとくに行政官と学者に偏りがちだが、私は主役であるべき職人の参加をより重要視した。まず漢字文化圏の日本、韓国、中国、台湾から職人と研究者を東京に招いて開いた。政治と文化とを切り離れた本会議の姿勢に対す



ソウルでの討論会。左から金完培(韓国) 仮面、ハリ・ラム・シレスタ(ネパール) 紙塑仮面、アリ・ソレマニエ・フィニ(イラン) 絨毯、金芝希(韓国) 絨毯、朴允美(韓国) 絨毯



展示風景



朝鮮王朝後期の絨毯

る参加者からの評価も大きかった。第二回会議の準備を進めたところ、昨年の韓国代表をつとめた金英淑先生(東洋服飾研究院院長・文化財委員)より韓国でも開きたいとの強い要望で、ソウル大会が実現した。本年は日本(岐阜県東濃の木匠)、ミャンマー(バガンの藍胎漆器)、ネパール(ヒンドゥー教の紙塑仮面)、イラン(絨毯)の代表を招いた。十月二十、二十一日は東京都写真美術館で二十五、二十六日にはソウルの韓国文化財保護財団講堂で開催した。韓国は独立以来伝統の手仕事の保存や後継者の育成に大きな関心をよせ、重要無形文化財(人間国宝)指定などの措置を講じてきた。まず林永周韓国民学协会会长は「韓国の匠人文化」について、歴史的背景や各時代の職人制度の特色などについて述べた。会場のロビーには、各国の民族造形が展示され、日本の木材の伐採法、伊勢神宮のご遷宮のご用材の切りだしから、檜の家と学校や家具造りが写真で紹介された。ミャンマーは仏前に供える藍胎漆器の大形食籠(ソン・オック)高さ一メートル。

ネパールからは、ネワール族の精神的な支えであるヒンドゥー教の象徴十三神の多彩にして呪力をもつ紙塑仮面。イランは絹の絨毯に加え、少数民族のキリムとよぶ織り織りの敷物などが展示された。韓国からはそれぞれの主題に対比する形で発表が行われ、伝統芸能の河回仮面造りの金完培(キム・ワンベ)氏は、韓国の仮面(タル)は四百種ほどあり、信仰と芸能に分かれると述べ、その実例と造形技法を紹介した。螺鈿漆器の李亨満(イ・ヒョンマン)氏(重要無形文化財一〇号)は鮑や青貝を用いての造形技法や、深い輝きをもつ作品を披露した。さらに朝鮮王朝後期の絨毯をはじめて公開され、金芝希(キム・ジヒ)、朴允美(パク・ユンミ)教授らが染織法を述べた。ソウル大会では上記のテーマ別に各国代表と韓国の専門家が相互に発表しあい、活発な議論が展開された。アジア五カ国の匠人がそろったことに

関心が高まり、職人や大学や文化財関係者の参加が多く、会議用の出版物は二週間で売り切れたとの報告を受けた。



かねこ かずしげ

1925年生まれ。国学院大学文学部史学科卒業。アジア民族造形文化研究所所長。(財)アジア民族造形館理事長。アジア民族造形学会会長。中国・中央民族大学客員教授。著書に『日本とアジア - 生活と造形』、『芹澤銈介全集』、『和紙の造形』、『民族造形学序説』、『アジアの民族造形』など。

冷麺について

原 武史

山梨学院大学助教授

百貨店の食堂街にある冷麺店で食べるのと、冷麺店が集まる中部市場近くの五辻洞(オシツツウ)で食べるのでは、かなり味が異なることに気づいたのだ。前者が平壤式冷麺であり、後者が咸興式冷麺であると知ったのは、それから間もなくのことだった。

平壤も咸興も北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)の都市であり、冷麺がもとは米作に適さない「北」の食べ物であったことがわかる。この二種類の冷麺がどのようにして「南」に広がっていったのかは不明だが、私が韓国国内を旅行した限り、(焼肉屋で出る冷麺も含めて)平壤式の方が断然多いという印象を受けた。

一般に平壤式が、比較的あっさりしたスープに太麺が入った「水冷麺」を基本とし、スープを残して麺だけをお代わりできる「サリ」(日本では博多ラーメンの「替え玉」に当たる)があるのに対して、咸興式はスープがなく、極細でこしの強い麺に唐辛子みそ(コチュジャン)をまぶして食べる「ピビン冷麺」や「フエ(さしみ)冷麺」が多い。もちろん「水冷麺」もあり、「サリ」もできるが、頼めばスープの入ったやかんをもってきてくれるので、自由にかげられるところが平壤式と違ってありがたい。このスープは、平壤式よりもこってりしていてコクがあり、私自身は咸興式の方を好んだものである。

ところが最近、中国の北京に行く機会があり、平壤式、咸興式のほかに、延吉式と呼ばれるもう一つの冷麺があることに気がついた。延吉とは北朝鮮との国境に近い中国の延辺朝鮮族自治州にある都市のことで、北京市内の冷麺店のほとんどは延吉式といってよい。もちろん食べてみたが、印象としては前二者よりはむしろ後で触れるような日本のポピュラーな冷麺に

近く、咸興式よりも一層こってりした味を期待した私には少々拍子抜けの感が否めなかった。おまけに器は小さめで、「サリ」もなかった。

このように、同じ冷麺とはいえ、少なくとも三種類の冷麺が朝鮮民族により作られたわけである。いや冷麺といえ、このほかに日本の冷麺を外すわけにはいかない。例えば済州島からの移住者が多かった大阪の鶴橋では、店によってはかなり本格的な平壤式や咸興式の冷麺を食べることができ。

だがこれはあくまで例外であって、たいていの焼肉店で出てくる冷麺は、「本場」とは全く異なるものである。麺は一般に太くてラーメンのように黄色いものも多く、具もりんごやすいか、さくらんぼなど、本来なじまない果物がいろいろと入っている。「本場」の味に慣れてしまうと、到底これを冷麺とは呼べなくなる。

たかが冷麺と思うことなかれ。その興義を極めるのはまだまだ容易ではない。願わくば、いつか北朝鮮に行き、平壤と咸興で真正正銘の冷麺にありつける日が来ますように……。



はら たけし

一九六二年生まれ。早稲田大学政経学部卒業、東京大学大学院法学政治学研究所博士課程中退。国会図書館職員、日本経済新聞記者、東京大学社会科学研究所助手などを経て九七年から現職。専門は日本政治思想史。著書に『真諦と王権』(近く韓国語版刊行予定)、『出雲』という思想。『民都』大阪対「帝都」東京。など。

私は麺好きである。ラーメン、そば、うどん、きしめんなど何でも食べる。山梨の大学に赴任してからは名物のほうとうのとりこになった。そんな私が韓国に行ったときに必ず食べるのが、冷麺である。冷麺は、私の韓国あるいはさらに歴史的に溯って朝鮮王朝に対する漠然としたイメージを変えた。徳川体制という、幕府を中心としながらも分権的な政治体制が二百年以上続く中で、地方ごとにさまざまな特産物が生み出された日本とは異なり、朝鮮では儒教イデオロギーによる中央集権型の支配が長期にわたって確立され、文化的な同質性がきわめて高いと思っていた。だから、どこで食べようが冷麺は一種類しかなく、東京と博多で味が全く異なるラーメンのようなことはないと考えていたのである。

しかし冷麺は違った。同じソウル市内でも、ロッテ

助成事業 平成十二(二〇〇〇)年度 助成申請受付

来年度上半期実施事業(四、九月)の助成申請期間は、二〇〇〇年一月一日から二月一日までです。申請を検討している団体は、基金担当者にお問い合わせの上、来年度用の案内と申請用紙を入手して下さい。また、案内と申請用紙は基金ホームページでもPDF形式で配布しています。なお、申請期間以外の受付はいたしません。



訪日団

	計	男	女	
釜山文化人訪日団	15	10	5	99/10/12-10/19
韓国大学生 訪日研修団(3)	20	14	6	99/10/26-11/4
韓国大学生 訪日研修団(4)	20	13	7	99/10/26-11/4
韓国国際教育関係者 訪日研修団	20	15	5	99/11/2-11/9
初等学校教員訪日 研修団	20	16	4	99/11/2-11/11
済州大学生 訪日研修団	25	5	20	99/11/9-11/18
韓国大学生 訪日研修団(5)	18	12	6	99/11/16-11/25
高等学校日本語教員 訪日研修団	20	9	11	99/11/23-12/2

10～12月

学術文化研究者交流・招聘事業—研究者フェローシップ

・ 訪日フェロー (1999年10月 - 2000年1月までの受入)

日韓学術文化青少年交流事業

研究者	研究テーマ	受入機関	研究期間
李勉雨	アジア的新政治経済体制の模索： 90年代後半日本と韓国の行政改革と 金融改革に対する事例比較研究	明治学院大学法学部	99/10/1-2000/2/28
朴贊億	韓国経済システムの比較制度分析	東京大学社会科学研究所	99/12/17-2000/12/16
王泰雄	日本大正文化の実と虚 - 白樺派文学を中心に -	大東文化大学大学院文学研究科	99/12/20-2000/12/19
陸根孝	日本の管理システムの海外移転に関する研究	横浜国立大学経営学部	2000/1/13-2000/12/19

平成12(2000)年度フェローシップ申請は、1999年10月末日をもって締め切りました。

事業報告書

この期間に、以下の事業の報告書が完成しました。基金図書センターで閲覧できます。

・日韓共同研究フォーラム第二次研究チーム 東京総会報告書（一九九九年九月十八日実施）

・日韓文化交流会議 第1回ソウル会議報告書（一九九九年九月二十二日実施）

・第12回日韓・韓日合同学術会議「世界の中の東アジア文化」（一九九九年十一月十二～十四日実施）（写真）



韓国大学生訪日研修団
（10月26～11月4日）
生け花体験



韓国国際教育関係者訪日研修団（11月2～9日）日本の学校給食を試食



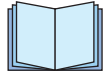
日本大学生訪韓研修団（11月16～25日）
亜洲大学校での学生懇談会

訪韓団

	計	男	女	
佐賀県教員 訪韓団	19	16	3	99/10/5-10/14
山形県教員 訪韓団	19	13	6	99/10/12-10/21
日本大学生 訪韓研修団（1）	20	9	11	99/11/2-11/11
日本大学生 訪韓研修団（2）	18	9	9	99/11/16-11/25

日本大学生訪韓研修団
（11月16～25日）慶州見学





図書センター情報

逐次刊行物の受け入れ状況 - ニューズレター

誌名	発行	刊行頻度	所蔵号数	欠号
あけぼの通信	ハングル資料研究会	不定期	97年度版No.1(97年2月25日) ~	
アジア研究所所報	亜細亜大学アジア研究所	不定期	90号(98年5月)~	
アジアセンターニュース	国際交流基金アジアセンター	季刊	創刊号(96年春号)~	No.2(96年夏号)
アジアンあい	アジアセンター21	不定期	No.53(98年1月)~	
アリラン通信	文化センター・アリラン	不定期	1号(93年8月)~	
韓国観光ニュース	韓国観光公社	月刊	No.88(95年5月)~	No.89~90(95年6~7月)・No.92(95年9月)・No.94~95(95年11~12月)
高等学校韓国語教師研修会 世話人会だより 눈길	高等学校韓国語教師研修会 世話人会	年2回	No.1(99年4月)~	
国際文化フォーラム通信	国際文化フォーラム	不定期	no.26(95年3月)~	no.27~30・no.32~33・no.38
セフルム	朝鮮奨学会	不定期	5号(99年2月)~	
全朝教通信	全国在日朝鮮人教育研究協議会	不定期	43号(95年6月15日)~	60~61号
ともに...	兵庫県在日外国人教育研究協議会	隔月刊	9号(97年5月)~	
名護屋城博物館年報	佐賀県立名護屋城博物館	年刊	No.1(93・94年度)~	No.2(95年度)
日韓合同授業研究会会報 우리	日韓合同授業研究会	不定期	1号(94年11月)~	17号
北東アジア文化通信	鳥取女子短期大学	不定期	No.1(94年12月)~	No.6~9・11・13
レインボーネット	レインボーネット	年3回	創刊号(98年7月)~	
木苺	《多文化共生をめざす》在日韓国・朝鮮人生徒の教育を考える会	不定期	75~93号(95年12月10日~99年7月4日)	
京都版全朝教通信	全朝教京都	不定期	1~23号(92年7月~97年11月)	
虹のように	『虹のように』編集委員会	不定期	創刊準備号~10号(94年12月~98年12月)	
月刊ヘボジャ	ヘボジャの会	月刊	創刊号~Vol.9(97年1月~98年1月)	

この欄のニュースレターについては現在新号の受け入れはしていません

基金ホームページURL

<http://www.asc-net.or.jp/jkcf>

ホームページ E-mail:jkcf@asc-net.or.jp

図書センター E-mail:lib1jkcf@oak.ocn.ne.jp

基金サイトから日韓交流を

昨秋から基金ホームページサイトでは、基金事業と日韓交流・韓国理解に意欲をもつ方を結ぶための情報提供を行っています。

例を挙げると、基金では韓国大学生訪日研修団の受け入れを行っていますが、より多くの日本の大学生に韓国の大学生との交流の機会をもってもらうため、ホームページ上で学生交流会の開催を告知し、電子メールで参加の受け付けをしています。

また、フェロウシップ、助成事業についてのガイドラインおよび申請書式は、ホームページからダウンロードしたものを公式の申請書類として利用できるようにしました。

基金の概要や、図書センターの韓国語逐次刊行物リストなどは韓国語でページの内容を見られるようになっています。

基金サイトの情報を活用して、日韓交流や韓国理解のために役立ててください。



発行 (財)日韓文化交流基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号
虎ノ門ワイコビル3F
電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326
発行日 2000年1月7日